
S GAME

raki & 竜司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S G A M E

【Nコード】

N 7 5 6 9 U

【作者名】

r a k i & 竜司

【あらすじ】

作者：r a k i

とあるファミレスで出逢った男女の普通の会話。
しかしそれはすべて造り物だった。
彼らが参加した「ゲーム」とは？
読者挑戦型推理小説です。解答は感想欄にあります。

（前書き）

こういった作品は初めて作りましたが、ちょっと乱雑だったかなと反省。若干イージーだったかもしれない。

一人でも騙されてくれた（騙されるとはちょっと違いますけれど）方がいらっしゃったら作者としては嬉しい限りです（笑）

初夏の朝、東京某所にあるファミレスの扉をゆっくり開けて、若い男が店内に入る。男は銀の細縁メガネに赤みがかった金髪、そしてクロスアートのイヤリングが左耳にだけ付けられているのが特徴的だ。黒い半袖のＴシャツにインディゴ色のジーンズの出で立ちで、左腕にはシルバーのブレスレット、右手にはG a G aの腕時計が付けられている。

ポケットから唯一携帯している所有物である黒色の携帯電話を取り出すと昨日受信したメールを確認した。待ち合わせる場所や時間などがそこには書かれている。

店内を見渡すと、目的の女性を目の端に捉えた。観葉植物の陰に隠れて姿は詳しく判らなかったが、午前中の店内では客の人数も限られている。人違いではないだろう。

男が女の座る席に近づくと、彼女は男の容貌を数秒見つめ、短く手を振った。男は緊張を隠すように、前髪を僅かにいじった。これは男の癖である。

男は改めて女を見た。黒の瞳に、高い鼻、髪は長い黒髪で、相当の美人だった。肌は白く、服装がベージュのワンピースであるのに関わらず、生地と肌の色のコントラストがはつきりとしている程だ。年齢は二十歳を少し過ぎたところだろうか。男と同じく、左耳にだけ黒いクロスアートのイヤリングを付けている。

両者が席に着くと、店の指定カラーと思われるオレンジ色の制服を着たウェ이터が注文を催促しに来た。男はテーブルの上に女が注文したと思われるダークブラウンの飲物があるのを一瞥して、口を開いた。

「あー、えっと、俺もブラックコーヒーで」
すると女は微笑しながら言う。

「いいえ、これはブラックティーよ」

「……。うーん、じゃあ、やっぱり俺も紅茶にします」

するとウェ이터は「かしこまりました」と応え、店の奥に消えた。

女は紅茶を一口飲むと、自己紹介をした。

「榎本紗英えのもとさへです」

榎本は丁寧な頭を下げ、男も軽く会釈をした。

「遅くなつてすいません、鈴木真司すずきしんじです」

鈴木は妙に緊張し、顔を赤らめた。男が見た女性の中で、榎本は最も美しい容姿をしていた。そのせいか、酷く調子が狂う。

「顔が赤いですよ、真司さん」

「……きつと、あなたがお綺麗だからですよ。吃驚しました」

男は苦し紛れにそう言うと、女は笑みを浮かべ、冗談めいた口調で返す。

「苦言を呈するようですけれど、邂逅して早々にそんなことを言う人は信用できませんね。それに、私、綺麗じゃないです」

「謙遜しないでくださいよ。それに邂逅ではないんじゃないですか、これは。ある意味必然というか、逢うべくして逢ったような感じがしますけれど」

「これは立派な邂逅ではなくて？ 私はこのようにして人と出逢うのはあなたで初めてですけれど、こうやって逢うには多少の条件が要りますでしょう？ 真司さんは過去にご経験は？」

「さあ……ざつと四、五人は。ただ、あなたみたいな上品な方は初めてですね。なんというか、こう、悪女みたいな雰囲気のある人はいましたけどね……」

鈴木は苦笑しながら過去を振り返った。丁度その時、ウェ이터が紅茶を運んできた。

ティーカップの中の紅茶は湯気を立てて液面を震わせた。

「……しかし真司さん、ブラックティーと聞いてよく紅茶だつて解りましたね。私、ブラックコーヒーという言葉につられて、ついブラックティーって言ってしまったのですけれど」

「好きなんですよ、紅茶。なので紅茶の呼び名はわりと知ってる方なんです。紗英さんは外国にいた事があるんですか？ あんまりブラックコーヒーにつられてブラックティーって言っちゃう人は見たことないですけど」

「先月に帰国したのですが、半年ほどイギリスに。ただ、イギリスの方は紅茶はティーと言うと思うので、あまり関係ないかもしれませんがね」

「それって紗英さんが変わってことじゃないですか。もしかして天然だったりします？」

「偶に言われるのですが、私は自身を天然とは思ってないですよ。私がずれてるんじゃないかって世間がずれてるんです」

榎本は少し怒ったような表情を作って、鈴木から目を逸らした。その仕草が可愛らしく、鈴木は軽く動揺した。完全に榎本に主導権を握られているようだった。

「超自己中じゃないですか、その考え方がそもそもずれてますって」「つまらないことを言うんですね、真司さん。私はそれを個性と呼びたいところですけれど。でも、真司さんもちよつと変わってますよね。右手に時計している人、少数派じゃないですか？」

「って、思うでしょ？ でも最近右手に時計する人増えてますよ。俺はギターやるんだけど、右にブレスレットしていると邪魔になっちゃって、デザインの時計だと大丈夫なんですけどね。紗英さんは楽器とかの趣味ないんですか？」

「……特にはないですね。幼い頃にピアノとかやりましたけれど、相性が悪かったのかすぐに辞めてしまいました」

「なあんだ、ヴァイオリンとかやってそうないメージだったんだけどなあ。……あ、俺、ちよつとお手洗い行ってきます」

鈴木は尿意を覚え、席を立った。榎本が相手では話も長くなりそうだと感じた鈴木は我慢せずにトイレに行っておくことにしたのだ。会話が連続したときに席をたったら集中力が切れそうだった。早めにリフレッシュしておいた方がいいという判断だ。

用を足して、手を洗いながら鏡を見ると、鈴木は右腕の時計に目をやった。本当のところ、鈴木はギターなどやっていない。右手に時計をしているのもある事情で仕方なくそうしているだけであった。おそらく榎本紗英が音楽をやっていないというのも嘘だろう。よく見ると榎本の左の鎖骨の少し上に、赤い痕があった。それを見つけた鈴木は、その痕がおそらくヴァイオリンをやっていて付いた痕だろうと推測した。

しかし、彼女はそれを隠した。別に何の意味もない。単にその時隠そうと思ったからに過ぎないだろう。そんなことをいちいち気にしていたら、そもそも彼女の名前さえ偽名かもしれないし、イギリスにいたというのも怪しいところだ。

鈴木は頬を叩いて、トイレを出た。

席に戻ると、相変わらずの佇まいで榎本は微笑している。その微笑は妙に魅力的で、つい口元に目がいってしまふ。この状況でここまで落ち着いているのは逆に怖いものがあつた。

「人気ないんですかね、このお店。私は好きなんですけどね。あんまり人が来ないですね」

「微温ゆるくなった紅茶を飲まないといけなところとかが原因では？俺、ドリンクバーがないファミレスって初めて見たな。紅茶一杯で長時間居座るのも嫌でしょ？」

「ネットカフェとかの方が良心的ですね。でも、紅茶一杯くらい新しいの頼んだらどうですか？ けちな人間だと思われてしましますよ？」

「飲み物にお金を使うのって、なんだか抵抗ありませんか？」

「払いたくないお金を払うのはいささか気分が乗らないことではありますね。でも、紅茶は好きなんでしょう？」

「一つずつ注文するのも嫌じゃないですか、紅茶一杯だけオーダーしたら、ちよつと申し訳ない気分になると思うんですけど」

「二つならどうですか？ 私の分も頼んでおいて下さる？ 今度はアイスコーヒーを。私もお手洗いに行って参りますので、その間に」
「変な人だなあ、さつき俺がいない間に行って来ればよかったのにま、いいですよ、頼んでおきます。アイスコーヒーね」

鈴木が微笑みかけると、榎本もあの魅力的な微笑を返して、席を離れていった。

今度は、彼女が休憩タイムってわけか。

瞼を閉じて深く息を吐いた。相変わらず疲労感の溜まる会話だ。

鈴木は榎本が姿を消したのを確認し、ウェ이터を呼んだ。アイスコーヒーと紅茶を一つずつオーダーし、微温くなつた紅茶の残りを飲みながら一息いれることにした。

しばらくすると、飲み物を持ったオレンジの制服を着たウェイトレスが鈴木の席の隣に来た。ウェ이터しか見かけていなかったが、どうやらウェイトレスもいるらしい。

「ホットコーヒーをお持ちしました」

「……あれ？ 俺が頼んだのアイスコー……」

言いかけて、鈴木は戦慄した。眼前で起きた出来事が信じられない。あまりに信じがたい光景だった。

ウェイトレスの顔は榎本紗英に驚くほどに似ていた。否、それは同一であつたのだ。黒の瞳に、高い鼻、しかし、目の前のウェイトレスが彼女であるなんてことは鈴木には信じられなかった。何しろ、それは鈴木の負けを意味してしまうのだから。

それに、目の前の女はショートカットの茶髪だった。決して、長い黒髪などではない。それが、鈴木が疑いさえ向けられなかった原因だった。

「……………待てよ、まさか、嘘だよな……………」

鈴木は震える声でそう言った。最早、自問であるとも言えたかもしれない。

「その言葉は、少々遅すぎましたね」

ウェイトレスはそう言うと、微笑した。それを聞いて、そして見

て、鈴木は自分の敗北を自覚した。その微笑は、まさに榎本紗英の魅惑的な微笑だったのだ。

「かつらと服はトイレに隠してあったの。なかなか楽しかったわ。来世では気を付けなさい？」

ウェイトレスに扮した榎本はそう言い残し、その場を去っていった。彼女のその笑みは最後まで消えることはなかった。

その日、黒い携帯だけを持った若い男の遺体が、発見されたという。

（後書き）

もしも、この話の意味が判らなかつたら、感想欄かメッセージで伝えていただければ解答いたします。それほど難解ではないと思うので、一回読んで気付いた方もいらつしやると思います。

作者である以上、難易度のほどは自分では判らないところではありますが・・・。

楽しんでいただけたならば幸いです。

拙作を読んでくださった方々に深く感謝します！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7569u/>

S GAME

2011年9月19日03時30分発行